

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

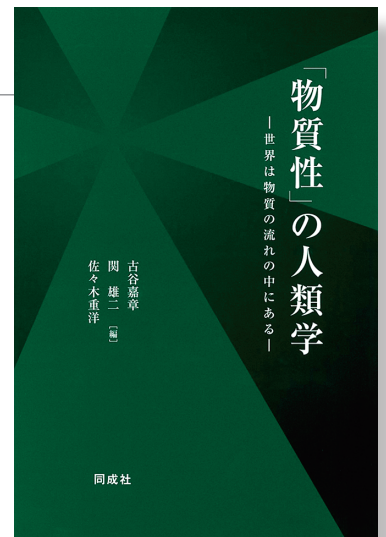
「物質性」の人類学：世界は物質の流れの中にある

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古谷, 嘉章 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008693

「物質性」の人類学

—世界は物質の流れの中にある

古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋編
同成社／2017年／本体 5,000円＋税



今年の夏、私は母、そして妻の妹を、立て続けに喪うことになった。それぞれ浄土宗と浄土真宗で葬儀が行われ、お骨は骨壺に納められて自宅でしかるべき設えの中に置かれ、その前で線香が焚かれ、いずれはお墓に納められる。

私たちは物質からなる「この世界」に身体という物質として存在していて、死ぬと腐敗・分解という不可逆的变化が始まる。その「自然な変化」に抗して、人間の社会は、ミイラにしたりエンバーミングを施したり、火の助けを借りてお骨に変換したりして介入する。お骨は、触れることのできる物質として「この世界」に存在し続けるが、お骨という別種の身体の中に懐かしいあの人は居続けると私たちは考えているのか。あるいは追憶の手掛りにすぎないのか。土葬となると、また別の話になる。土に埋めるという行為は、実はとても不思議である。私たちは、遺体や副葬品だけでなく、生ゴミから放射性廃棄物まで不用になったモノも土に埋め、財宝を土に埋めて秘蔵したりもする。そうした行為の前提には、土という物質の性質についてのどのような理解があるのか。お骨であれ土であれ、物質についてのこうした根本的な問いの重要性を、人類学者はともすると忘れてしまう。

外国から人類学者がやってきて、「死んだ2人はどこに行ったのか」と尋ねたとしよう。私は、西方浄土といった異界や阿弥陀如来といったエイジェントに言及しながら仏教的な往生について語るだろう。すると彼女は、それを、ネイティブの興味深い信念として記録し、そして、科学と矛盾するとはいえず、支離滅裂ではなく、それなりに筋が通った「世界観」（つまり文化）として説明するだろう。人類学者として、私たち自身が行っているルーティンワークである。

しかしそれだけでは、人類学的探究の道半ばなのではないか。人類学は、文化の多様性を弄ぐ一方で、西洋近代の科学的物質観を自明の前提としてしまい、「世界と人間が物質から成り立っている」という問題については、自然科学にアウトソーシングしてすませてきたのではないか。しかし人類学者自身の社会を進化の頂点として特権化することなく、過去も現在も分け隔てなく平等に扱い、近現代科学もひとつの文化として捉えるパースペクティブを採用し、「物質性」(materiality) という問題に真正面から取り組むことによって始めて、真に人類学の名にふさわしい学問になるのではないか。おおむね以上のような問題意識の下、2010年の論文「物質性の人類学に向けて」（古谷 2010）をベースに、共同研究「物質性の人類学—物性・感覚性・存在論を焦点として」（2011年10月～2015年3月）を開始したのだった。

その成果である本書では、「物質性」を、焦点の置き方に応じて3つの問題系に分ける。第一の「物性」(physicality) の問

題系は、「世界は人間にとってどのような条件か」を扱う。物質は、肉やお骨のような固体であれ、水や血のような液体であれ、空気や線香の煙のような気体であれ、一定の物理的・化学的性質を具えている。たとえば、石や木、銅や鉄、コンクリートやガラスという物質の性質は、地球上に存在する人間の在り方をどのように条件づけてきたのか。第二の「感覚性」(sensuosity) の問題系は、「人間は世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」を扱う。たとえば、金 (gold) という物質について、第一の問題系では「人間から独立した」物性に注目するのに対して、第二の問題系では、黄色く光るという金と真鍮の共通性質を前景化する社会があるといった類のことに光を当てる。「人間にとって」重要な性質は、その物質の使用法に影響を及ぼすのである。第三の「存在論」(ontology) の問題系は、「人間はどのような世界に住んでいるのか」を扱う。人間はモノと違い、主体的に能動的に世界に住んでいる。今年の夏の私の体験に即して言えば、死後に赴く異界や、そうした異界をも含んで成立している「私たちの住んでいる世界」を、(現下の科学的世界とは矛盾するがゆえに) 幻想として扱うのではなく、当の人間たちの一度限りの人生の舞台としてリアルに実在する世界として理解したい。その世界は何を材料として構成されているのだろうか。「この社会の人々は西方浄土や阿弥陀如来というものが実在すると信じていて、念仏さえ唱えれば死後も浄土で生きることができると信じている」と記述することで人類学者の仕事は完了したと言い逃れてはいけぬ。人類学に課せられた宿題を勝手に狭めてはいけぬし、何よりも、人類学の面白みが激減する。

上梓した論文集は、まだまだ荒削りの模索の経過報告にすぎない。多くの人類学者が「物質性」という問題意識を共有して、それぞれに、今まで考えなかったことについて考え始めていただけるならば、共同研究を組織し、論文集を編んだ者としては、とてもうれしい。

【参考文献】

古谷嘉章 2010 「物質性の人類学に向けて—モノ（をこえるもの）としての偶像」『社会人類学年報』36: 1-23。

文 古谷 嘉章

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は文化人類学。ブラジル・アマゾン圏を主なフィールドとして、憑依、土器、芸術、モダニズムなどについて考えてきた。近年、現代日本における縄文文化の調査研究を進めている。著書に『異種混淆の近代と人類学』（人文書院 2001年）、『憑依と語り』（九州大学出版会 2003年）などがある。